

# 「まあ」のスケール作用性

——副詞的用法と談話的機能の統合に向けて——\*

川 田 拓 也

In this paper, I suggest that the Japanese sentence adverb or discourse particle *maa* functions as a scalar operator. *maa* determines the maximal value of the scale that it operates on. My proposal is that the various behaviors of *maa* involve this characteristic of *maa* as a scalar operator.

キーワード：まあ、文副詞、スケール、scalar implicature、緩和表現

## 1. はじめに

日本語には発話の「和らげ (hedge/mitigation)」や「ぼかし」のために使われる表現が多く存在することが知られている。例えば、“sentential hedge”として機能する「ちょっと」(Matsumoto 2001) や、名詞修飾成分である「ような」、概数表現である「ほど」(井上 1993) などが挙げられる。文副詞的に振る舞う「まあ」にも「発話の和らげ」と捉えられる性質があるといわれている(飛田・浅田 1994)。例えば、下の(1a)では、Bによる花子の足の速さに対する評価が必ずしも高くないこと、(1b)では、BがAの依頼に対して必ずしも同意できないことが「まあ」によって聞き手に伝わる。

- (1) a. A : 花子って、足速いの?  
      B : まあ、速いよ。
- b. A : この仕事を手伝ってもらえる?  
      B : まあ、いいよ。

本稿では「まあ」の語彙的に持つ性質をスケールへの作用に求めることで、他の緩和表現との差異を明らかにできることを示す。また、「まあ」の見せる様々な振る舞いが、スケールへの作用との関わりの中で実現することを述べる。

本稿の構成について述べる。次節において、「まあ」の分布を明らかにし、「まあ」が文副詞としての性質を持つことを示す。3節では先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。4節において「まあ」と scalar implicature との関わりについて述べ、「まあ」が文副詞として語彙的にもつ意味内容を規定する。5節では、「まあ」が一種の発話行為のスケールに作用することで、緩和表現 (hedge/mitigation) としての機能が果されることを述べる。さらに6節では具体的な意味内容が失われたフィラーとして振る舞う「まあ」について、談話的な側面から考察し、最後に本稿をまとめる。

## 2. 「まあ」の分布とカテゴリー

### 2.1. 「まあ」の分布

小説など文字化された資料から「まあ」を探すと、「まあ」は文中、文頭を問わず様々な位置に現れることが観察される。

(2) a. 漱石: まあ大丈夫だろうよ。

妻: まあじゃ困るわ。ほんとうにだいじょうぶでなくっちゃ。 (『手紙』)<sup>1)</sup>

b. 毎日五枚書くとして四百枚はマア三ヵ月ね。 (『獄中への手紙』)

c. おきみ君さんの相手は田中君と云って、無名の一まあ芸術家である。 (『葱』)

d. (子規は) 滅多に人と交際などはしなかった。僕だけどういものか交際した。

一つは僕の方がええ加減に合わせて居ったので、それも苦痛なら止めたのだが、苦痛でもなかったから、まあ出来ていた。 (『正岡子規』)

(2a) では返答の際に「まあ」自体が否定されている。(2b) の「まあ」は直後の名詞句を修飾し、概数を表している。(2c) では、文脈上、書き手 (主人公) は「田中君」をプロの芸術家と信じていない。動詞句と共起する (2d) の場合、子規が「条件付きで交際可能な男」であることが「まあ」によって明示される。このように「まあ」はそれ自身で文の意味に影響を与えることがわかる。特に (2a) では「まあ」自体が否定可能であることから、文の真理条件的な意味を担っていると考えることができる。

### 2.2. 「まあ」の文法的カテゴリー

本節では、「まあ」が話し手の真偽判断に関わる文副詞としての振る舞いを見せる一方で、後続する要素の持つスケールに制限を与える程度副詞的な性質も持ち得る標識であることを述べる。

本稿で扱う文副詞とは、節に統合されない “disjuncts (離接詞)” (Quirk, Greenbaum, Leech, and Svartvik 1972: 268) を指すこととする。Quirk らの議論をもとに日本語の文副

詞を分析したものとして、澤田(1978), 中右(1980) などがある。(2b) の「まあ」は「多分」や「だいたい」といった表現と置き換えても大きく文意は変わらない。「多分」や「思うに」など概言的な副詞は中右(1980)において「真偽判断の副詞」と分類されている。「真偽判断の副詞」とは「命題の真偽の度合に対する査定の判断を示す」(ibid: 196)と定義される。真偽判断の副詞は共通して「不確定的コンテキスト」(ibid.: 196)に現れない特徴を持つ。具体的には以下の環境での生起が制限される。

・命題否定の作用域に生じない。

- (3) \*確かに朝倉先生は送別会に出席されなかったのではなく、たぶん出席されなかったのだ。(澤田 1978: 22 (96))

・直接(間接)疑問の作用域に生じない<sup>2)</sup>。

- (4) a. \*多分、次郎は道江に恋をしていたのですか? (澤田 1978: 20 (87))  
b. \*私は彼らが多分早退できるかどうか尋ねた。(中右 1980: 196 (4e))

同じことは「まあ」でも観察される。

- (5) a. ??この部屋は、まあ明るくないのではなく、確実に明るくないね。  
b. ??まあ太郎は賢いのですか?<sup>3)</sup>  
c. ??わたしは、次郎に、まあ太郎が賢いかどうか尋ねました。

このように、「まあ」は「真偽判断の副詞」と同じ環境を要求するが、必ずしも「思うに」や「たぶん」と同じ意味内容を持っているわけではない。例えば、下の(6)のように「たぶん」は「まあ」と自然に共起し、「たぶん」の意味が冗長になったり、強調されることはない。

- (6) そんなデータの取り方をして、全国の労働者を対象に行った(たぶんまあまともな)調査と比較しても全く説得力を感じません。(ブログ『学舎日記』)<sup>4)</sup>

(6)における「まあ」は「まとも」かどうかの真偽に言及しているわけではない。どの程度「まとも」という、「まともさ」の度合について言及していると解釈できるだろう。例えば、「ある程度」といった表現に置き換えても、文意は大きく変わらない。「まあ」は「命題の真偽の度合」だけではなく、(1a)や(6)のように後続要素の持つ意味の度合に対して

も影響を与える。つまり機能的には程度副詞的な性質をも持つといえる。

### 3. 先行研究

#### 3.1. 談話標識としての「まあ」

前節では、「まあ」が特殊な文副詞であることを述べたが、「まあ」を副詞としてみる先行研究は少なく、多くは「談話標識」と捉え、その機能面から考察するものが多い。特に、「まあ」の基本的な機能を提示し、その機能から様々な用法が派生されるという考え方を採る。例えば、川上（1993, 1994）は「まあ」の基本的な機能を「概言」としている。また、富樫（2004）は「まあ」の機能を「曖昧性」に求めている。富樫（2004）によれば「まあ」は次のように記述される。

- (7) 「まあ」の機能：ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す。あるいは、計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す。

（富樫 2004: 134 (52)）

(7) によって聞き手の存在を仮定せずに「まあ」を記述できるので、独話での使用も取り込める。聞き手が存在する時は次のような機能として実現する。

- (8) 「まあ」が表す処理の曖昧性から生じる「和らげ」の効果が、（実際の計算処理とは関係なく）聞き手に対して示される。

（富樫 2004: 140 (73a)）

一方で、川田（2007）は談話の情報構造に着目し、「まあ」の分布を考察したものである。「まあ」は話し手が聞き手に対して新情報を与えるときにヘッジ的な機能を帯び、また、話し手が新情報を受け取ったときに驚きを表す「まあ」が使えることを文末形式との共起関係によって示した。下の例のように話し手の知らない情報（9a）や聞き手との情報共有が可能な環境（9b）では「まあ」が不可となる。つまり、「まあ」は話し手のみが持つ新情報を聞き手に提示する際に現れるという観察が得られる。

- (9) a. ??まあ太郎は学校に行ったのですか？  
b. ??まあ新しいパソコンを買ったのですね。（ともに驚きの解釈は可能）

#### 3.2. 先行研究の問題点

先行研究による記述は、確かに「まあ」の様々な用法をうまく捉えられており、「まあ」の

性質を満たすための必要条件は備えている。しかし、「概言」や「曖昧性」、「新情報の提示」を表すときは必ず「まあ」が現れるかというそうではない。つまり、これらの定義は「まあ」を記述するには強すぎるのである。たとえば、「概言」や「曖昧性」であれば、「たぶん」や「思うに」のような他の真偽判断の副詞と区別することができない。また、「だろう」や「かもしれない」といったモーダルの助動詞も「概言」を表すことはよく言われている（寺村 1984: 219）。従って、「まあ」の意味を他の言語形式のもつ意味と区別できる形で記述する必要がある。

次節以降では「まあ」が文副詞の一つとしてコード化されるべき意味を特定する。さらに、「まあ」の緩和表現的な用法など真理条件的な意味とは無関係な用法については、「まあ」の持つ性質が、発話行為へ作用することで実現することを述べる。このような記述を与えることで、他の緩和表現の振る舞いととの差異を示すことができる。

## 4. Scalar Implicature と「まあ」

### 4.1. 森田 (1983)

「まあ」の機能をスケールの観点から記述したと思われる先行研究として森田 (1983) が挙げられる。

森田 (1983) は、下の (10) のような例で使われる「まあ」を「軽く抑えた判断」(ibid.: 279) を表すとしている。具体的には「小から大へと伸展していくある状況や何らかの働きが、何らかの条件でストップする限界点を冷静に認め、現実の事実として受け止める、もしくは自身の控えめの判断として示す意識である」(ibid.: 279) とされる。

- (10) a. 子供のやることだからまあ仕方がない。 (森田 1983: 280)  
b. まあ我慢しましょう。 (森田 1983: 280)

筆者の解釈では、森田 (1983) による「まあ」の基本的な性質は「話し手による限界点の設定・認識」にあると思われる。しかし、「限界点」とは、「進展していく状況や何らかの働きがストップする点」とされ、明示的に限界点とは何かについて示されているわけではない<sup>5)</sup>。本稿では、「限界点」とは「まあ」の与えることのできるスケールの限界点と解釈し、森田 (1983) の観察を拡張した分析を行う。

### 4.2. Scalar Implicature

「まあ」によって与えられるスケールを観察するにあたり、まず scalar implicature (Horn 1989) を導入する。

本稿では、ある二つの異なる表現の一方が他方よりも高い（低い）スケールを表すといえ

る条件を Horn (1989: 231)<sup>6)</sup>, Kay (1990: 63) に従い、次のように規定する。

(11) For distinct  $d_i, d_j$  in  $D_x$ ,  $P(d_i)$  entails  $P(d_j)$  iff  $d_j$  is lower than  $d_i$

( $P$  = Propositional function,  $D_x$  = Domain of  $P$ ,  $d_x$  = Members of  $D_x$ )

(Kay 1990: 63 (i))

すなわち、ある異なる二つの表現について大小関係があるとき、またはそのときに限りその表現を含む命題間に一方的な含意関係があると考え<sup>7)</sup>。

これ以降、含意関係 (entailment) を  $p \rightarrow q$ 、推意関係 (implicature) を  $p \rightarrow q$  と表す。

(11) に従い、 $P(x) \rightarrow P(y)$  が成り立つことと、 $x$  が  $y$  よりも同一スケール上で高いスケールを表すこと ( $x > y$ ) は同義と考える。

(12) a. 太郎の部屋はまぶしい。

b. 太郎の部屋は明るい。

c. 太郎の部屋はまぶしくない。

d. 太郎の部屋は暗い。

通常、(12a) が成り立つ時、(12b) も成り立つ。従って、(11) より、明るさのスケールについては、「まぶしい」の方が「明るい」よりも高くなる。ただし、上記定義に従うと、(12b) は (12d) を含意しないので、「明るい」と「暗い」の間のスケールを問うことはできない。また、(12b) の発話に対して、例えば (12c) という推意が生じる。この推意は Maxim of Quantity (Grice 1989: 26) に従うことで生じるとされる。

(13) Maxim of Quantity:

(a) Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).

(b) Do not make your contribution more informative than is required.

(Grice 1989: 26)

スケールの高い表現が低い表現を常に含意するとき、高い表現が “more informative” になる (Kay 1990: 66)。従って、(12a) について真であると確信しているにもかかわらず、(12b) を発したとすれば、(13a) に違反することになる。同様に、(12b) からは、(13) に従うことで、(12c) が推意として得られる。すなわち、以下のような関係が成り立つ。

(14)  $P(x) \text{+>} P(\neg y) (x < y)$

この推意を scalar implicature と呼ぶ。現実には太郎の部屋がまぶしかったとしても (12b) は偽の言明にはならない。つまり、(12b) から生じうる推意 (12c) はキャンセルが可能である。例えば、以下のような例が成り立つ。

(15) A : 君の部屋は明るいのか？

B : 明るいよ。実際まぶしくて勉強どころじゃないよ。

否定の環境では、肯定の環境とは逆の含意関係が成り立つ<sup>8)</sup>。例えば、(16a) は常に (16b) を含意する。

(16) a. 太郎の部屋は明るくない。

b. 太郎の部屋はまぶしくない。

すなわち、以下のような関係が成り立つ。

(17)  $P(\neg x) \text{->} P(\neg y) (x < y)$

それに伴い scalar implicature も逆になり、(18) のように表すことができる。

(18)  $P(\neg y) \text{+>} P(\neg\neg x) (x < y)$

例えば次のような例が成り立つ。

(19) X : 君の部屋、まぶしくない？

Y : まぶしくないよ。勉強はかどるし。( +> 明るい)

#### 4.3. 「まあ」の作用するスケール

本節では、「まあ」が後続表現に対して作用するスケールを観察する。特に、「まあ」だけがもつ意味を抽出するために、「まあ」と形式・意味的に類似し、また振る舞いも似ている副詞「まあまあ」を挙げ、二つの表現の差異についても言及する。

まず、肯定文の環境で「まあ」が現れた場合をみる。この場合、(20) のような分布を見せる。

(20) a. X : 君の部屋は明るい？

Y : {まあ/まあまあ} 明るいよ。

b. Y' : ?? {まあ/まあまあ} 明るいよ。

実際、まぶしくて勉強どころじゃない。

(20b) は (15) とは異なり、scalar implicature のキャンセルを明示的に表現することが難しくなるという現象が見られる。ただし、この振る舞いは「まあまあ」とも共通し、文意も大きく変わらない。つまり、「まあ」と「まあまあ」は scalar implicature のキャンセルを制限する。言い換えれば常に聞き手に対し「まぶしくはない」という推意を生成させる。

次に否定の環境をみる。

(21) a. X : 君の部屋はまぶしくないか？

Y : {まあ/??まあまあ} まぶしくない。

b. Y' : {??まあ/??まあまあ} まぶしくない。

実際明るくなくて困ってる。

まず、(21a) のように、「まあまあ」はそもそもスケールを持つような表現の否定と共起することができない。また、(21b) のように、scalar implicature を明示的にキャンセルするような環境においては「まあ」も「まあまあ」も生起することができない。肯定の環境と同じように、scalar implicature のキャンセルが制限される。

以上のように、肯定否定の環境に関わらず、「まあ」が付加されることによって、scalar implicature のキャンセルが制限される。スケールを持つ表現に「まあ」が付加されることで、常に当該表現より高いスケールの否定が推意として生じることになるので、「まあ」は共起する表現より高いスケールを指定できない。その結果、聞き手に対して、例えば「多く見積もって…」という解釈を促すことになり、消極的な評価としての意味合いを帯びることになる。これまでの観察から、「まあ」によってコード化される内容を以下のようにまとめる。

(22) a. 「まあ」が、ある要素に付加されることによって、その要素の持つスケールの上限が明示される。

b. その結果、「多く見積もって…」のような解釈を聞き手に促す。

## 5. 発話行為緩和表現としての「まあ」

先行研究では先述したとおり、「まあ」の緩和表現 (hedge/mitigation) としての性質が挙げられる場合が多い。「曖昧性」から「発話の和らげ」への派生を仮定した富樫 (2004) の他に、Fukuda-Karlin (2003) では「まあ」の対人的な側面に注目し、“Reduction of Face

Threat (ibid.: 59) ” や、命令などの和らげ (ibid: 64) としての機能が挙げられている。しかし、一方で Matsumoto (2001) は「ちょっと」の機能について考察しており、「ちょっと」をやはりヘッジと位置づけ、命令などの和らげなどに用いられるとしている。本節では、緩和表現としての「まあ」と「ちょっと」の差異について述べる。それとともに、「まあ」のスケールへの作用という性質が「概言」や「曖昧性」といった性質を「まあ」に持たせることを可能にすることを述べる。

### 5.1. 「まあ」による発話行為への作用

まず、緩和表現としての「まあ」についてみる。ここでいう緩和表現とは、ヘッジのような発話行為の和らげとして機能する表現を指す<sup>9)</sup>。

Matsumoto (2001: 6) では、「ちょっと」に緩和表現としての機能があることを遂行動詞との共起関係によって示している。下の (23) のように、「ちょっと」を伴って「命令する」のような明示的な遂行動詞を伴って命令を宣言することはできない。しかし発話内効力が弱い動詞を伴って依頼を宣言することは可能である。

- (23) a. ?? {ちょっと/まあ} 一週間の謹慎を命じます。  
b. {ちょっと/まあ} ここ一週間は顔を出さないようお願いします。

(23) の場合、「ちょっと」を「まあ」に置き換えてもそれぞれの対立は変わらない。「まあ」を伴った命令は不自然だが、依頼をする環境では自然になる。

「まあ」がなぜ「発話の和らげ」として機能するのか論じるために、以下では「命令」と「依頼」の関係について再考する。本稿におけるスケールは (11) によって含意関係のみで定義されている。Searle (1969) における「依頼 (requesting)」の適切性条件は以下のように規定される。

- (24) **Preparatory:** H (earer) is able to do A. S (peaker) believes H is able to do A.  
**Preparatory:** It is not obvious to both S and H that H will do A in the normal course of events of his own accord.  
**Sincerity:** S wants H to do A.  
**Essential:** Counts as an attempt to get H to do A. (Searle 1969: 66)

「指令 (commanding) / 命令 (ordering)」は (24) の全ての条件に下の (25) を加えることで成り立つ。

(25) **Preparatory:** S (peaker) must be in a position of authority over H (earer).

(Searle 1969: 66)

「指令/命令」は「依頼」の条件を常に含意しているので、命令行為が成り立つときは、依頼行為も常に成り立っていることになる。従って定義上「{指令/命令}> 依頼」というスケールを考えることができる。また、本稿におけるスケールとは異なるが、発話行為にスケールを仮定したものとして Leech (1983) もある。そこでは、話し手と聞き手にもたらされる利益、もしくは負担の度合に応じて命令と依頼が関係づけられる「負担・利益の尺度」などが提案されている (ibid: 178)。

そこで「まあ」を伴った「命令」に (22) を適用する。つまり、「まあ」をスケールを持つ発話行為に作用する形式として考える。「まあ」を伴った命令行為は少なくともその発話行為よりもスケールの低い発話行為に限定されることになる。その結果、命令を和らげること自体が許されない文脈や状況では、「まあ」の使用は不自然になることが予測される。例えば、以下の例のように、聞き手に対する強制力が強く、和らげることができない場面では、通常「まあ」を付加することはできないと思われる。

(26) ?? 火事だ！ まあ早く逃げろ！

同一スケール上にある (=一方が他方を含意する) 発話行為について、「まあ」は (22) の性質から、その発話行為を和らげる機能を果たすことを示した。ただし、以上の例からは、「ちょっと」との差異を示すことができない。

## 5.2. 「ちょっと」と「まあ」の差異

前節で示したように、「ちょっと」と「まあ」は緩和表現としての機能を共有する。このことは必ずしも「ちょっと」も (22) のような性質を持っていることを意味しない。以下では「ちょっと」と「まあ」の振る舞いの差について述べる。特に英語の緩和表現として知られる *I guess* (Brown and Levinson 1987) のような表現と機能的に対応すると思われる「まあ」の振る舞いに注目した。

(27) a. X : カレーの消費量が世界一の都市はどこだ？

Y : {まあ/??ちょっと} ニューデリーだと思います。

b. Y' : {まあ/??ちょっと} ニューデリーだろう。

c. Y'' : (その場で検索して) {??まあ/??ちょっと} ニューデリーです。

d. Y''' : {??まあ/ちょっと} 知りません。

e. Y<sup>III</sup>: {??まあ/ちょっと} なにそれ?

上記例では、「まあ」と「ちょっと」の分布に差がみられる。話し手 (Y) の知識状態に注目すると、以下の場合において「まあ」との共起が不自然となることがわかる。

- ・発話時において、当該命題についての知識がある場合 (27c)
- ・そもそも要求された情報に対する知識がない場合 (27d, 27e)

逆に「まあ」が使える環境は、話し手の100% 確実ではない、推論の結果得られたような信念について述べるときに限られる。話し手が真であることを知っている情報を最大とする知識状態のスケールを仮定すると、「まあ」によって示されるのは、最大点ではなく、それ以下の範囲、すなわち多く見積もれば最大となる範囲と考えられる。その結果「必ずしも正確ではない情報」が「まあ」によって示されることになる。いわば、「まあ」は話し手の確信の度合を反映するといえよう。しかし、「ちょっと」はスケールへの作用とは無関係のため、話し手の確信の度合に関して言及することはできない。「まあ」が「概言」や「曖昧性」という機能を持つのは「まあ」のスケール作用性が関わっていることによると考えられる。

以上より、本節では「まあ」が緩和表現として機能すること、そして、他の緩和表現とは振る舞いが異なること、さらに、「まあ」は話し手の確信の度合を反映することを指摘した。

### 5.3. 応答表現としての「まあ」

依頼に対して同意（もしくは拒絶）するような行為に対しても「まあ」の持つ (22) の性質があてはまる。

(28) a. X: この仕事をやってもらえますか?

Y: まあいいです。

b. Y: ??まあいやです。

(28) のような例でみられる「まあ」は川上 (1993: 72) において「消極的肯定」などと呼ばれているケースである。依頼に対して聞き手が行う選択は同意するかしないかの二値に限られるわけではなく、その間にスケールがあると考えることができる。(28) に (22) を適用すると次のように分析できると思われる。すなわち、「まあ」は完全な同意を最大値とするスケールに作用する。従って「まあ」によって「同意はできるが100% 同意できるわけではない」という解釈を得られることが予測される<sup>10)</sup>。

しかし (28b) は不自然に感じられる。通常依頼者は、依頼される側が同意できるか、同意

できるなら条件付きで同意できるのか、無条件で同意できるのかについて期待する。依頼者は依頼される側がどの程度同意できるのかについて期待しているのであって、どの程度拒絶するのかについては期待していない。従って、(28b)の不自然さは拒絶のスケールについての言及が語用論的に期待されていないことから生じると思われる。

## 6. フィラーとしての「まあ」

最後にフィラーとして現れる「まあ」(以下では「まあ<sub>f</sub>」と表記する)について考察する。以下の例は国立国語研究所(2004)の講演資料から採ったものである。

- (29) あの一ま父親がですねあの一まー今の JR 東日本えーかつての日本国有鉄道と言  
ういわゆる国鉄のまー職員だったということもありましてえーまー県内新潟県内  
ですけれどま転居しました。(国立国語研究所 2004: S01M0950)

フィラーはその性質上、話し手の意図的な態度などを示すものではない。従って、(29)における「まあ<sub>f</sub>」は何らかのスケールに作用しているようにはみえない。しかし、「まあ<sub>f</sub>」は後続発話においてケド節を伴って現れやすいという傾向がみられる。下の(30a), (30b)では、「まあ」を取り除いても発話全体の解釈には一切影響を与えないため、文副詞的な「まあ」とは考えづらい。かつ焦点アクセント等を伴うことがない点で典型的なフィラーであると考えられる。

- (30) a. 例えば東京球場の後に神宮球場とか後樂園球場とか色々な野球場まー東京です  
けど近いところ行きました。(国立国語研究所 2004: S09M0986)  
b. 出直してこいとかいう風なことを言われたりしてえーとま演奏の技術もそうで  
すけどもそれに対する姿勢というものが非常に問われる毎日でした。  
(国立国語研究所 2004: S05F0463)

上記例のような、談話中に挿入されたケド節について扱った研究として Nakayama and Nakayama (1997) がある。Nakayama and Nakayama (1997) によると、(30a), (30b) に現れるケド節は談話の“Background clause”を形成するとされ、談話において次のような機能を果たすと分析している。

- ・ The non-contrastive *kedo*-clauses in our narrative data serve to provide background information for the main line of the narrative (ibid.: 612)
- ・ *Kedo* serves to mitigate the force of illocutionary acts in order to maintain harmony

among speakers

(ibid.: 614)

例えば、(30a) では、「色んな野球場」という主張が「まー」以降で「東京限定の色んな球場」に弱められ、(30b) では演奏技術は全く必要ないというわけではないことを添えることで、演奏の姿勢が重要であるという主張を和らげている。

「けど」が上記機能を果たすとすれば、フィラーの「まあ」は「けど」によって構成される談話の“Background information”の導入部として挿入されていると考えることができる。「まあ<sub>f</sub>」はフィラーである以上、それ自体では意味機能を持つことはない。つまり挿入節が Nakayama and Nakayama (1997) のいう“Background clause”として機能するには、「けど」の存在は必須であるが、「まあ<sub>f</sub>」の存在は選択的である。一方で、ケド節が果たす「主張の弱め」と「まあ」の持つ緩和表現としての機能は矛盾しない。いわば、ケド節が果たす「主張の弱め」に「まあ<sub>f</sub>」は間接的に寄与していると考えられる。すなわちケド節は「まあ<sub>f</sub>」と共に“Background clause”を形成し、発話全体の主張を弱めるという談話的な機能を果たしている。

## 7. まとめ

これまでの観察より、「まあ」は本来的に scalar implicature のキャンセルを制限することで、作用するスケールに対して上限を与えるという性質を持つことを述べた。上のような性質から、「まあ」は適切な環境もしくは文脈が与えられると、それに応じた機能を果たすことができる。例えば、形容詞など程度を表す表現と共起すれば、その表現の程度に作用し、ある発話行為と共起すれば、その発話行為の持つスケールに作用して、ヘッジとしての機能を果たす。さらに「まあ」を伴って、話し手の主観的な判断などが表明される場合も「まあ」の持つ性質から予想される。

「まあ<sub>f</sub>」は直接的にはスケールへの作用という性質は持たないが、談話の“Background clause”を形成するケド節と機能的に合致し、共に現れやすい。このことから、ケド節が果たす「主張の弱め」に「まあ<sub>f</sub>」は間接的に寄与していることを示唆した。だが、それ以外の環境で現れた「まあ<sub>f</sub>」について、本稿では扱うことができなかった。また、驚きを表す「まあ」については一切言及できなかった。本稿で扱ってきた「まあ」との関連の有無についてもわからない。今後の課題としたい。

\* 本稿は、第9回日本語用論学会での口頭発表をもとにしている。

## 注

1) 断りのない限り事例は青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に登録されている小説から採っている。

- 2) そのほか、条件節内、*only* の作用域に生じないことが中右 (1980) で挙げられている。
- 3) ただし、「驚き」と解釈することは可能。
- 4) URL: <http://d.hatena.ne.jp/manabiya/>
- 5) さらにいえば、限界点を状況や働きに限定すると、(2a) や (2c) のような例を扱えなくなる可能性がある。
- 6) Quantitative scales are defined by entailment;  $P_j$  outranks  $P_i$  on a given scale iff a statement containing an instance of former unilaterally entails the corresponding statement containing an instance of the latter (Horn 1989: 231).
- 7) スケールの定義を明確にするために本稿では強い定義を採用した。スケールを含意関係だけで決定することに関しては議論がある (Horn 1989: 241)。
- 8) スケールの逆転については、Fauconnier (1975) を参照。
- 9) 'Hedge' is a particle, word, or phrase that modifies the degree of the membership of a predicate or noun phrase in a set (Brown and Levinson 1987:145).
- 10) 匿名査読者より、次の例は話し手自身の「不満足」といった否定的な心的態度を表し、スケール性では記述しきれないとの指摘を受けた。

(i) 子どものやることだから、まあ仕方がない。(= (10a))

(ii) (レポートを書き終わって) 時間がないから、まあいいか。

確かに「まあ」は独話において話し手がある事態について「妥協」をしたときにしばしば用いられる。「妥協」は、当該事態が話し手の望むものではなかった時に、その事態を話し手が (不本意ながら) 受容する場合に行われる。その結果「不満」という心的態度として解釈できると思われる。つまり「妥協」もまた、話し手自身の判断に対する不同意と位置づけることができるとすれば、(28) の場合と同じように扱えると思われる。そのように考えると、5.3 節での議論は聞き手の存在を前提としているが、聞き手は必ずしも必要ないのかもしれない。つまり「応答詞」でくくることは不適切である可能性がある。

## 参考文献

- Brown, P. and S. Levinson 1987. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. 1975. "Polarity and the Scale Principle." *CLS* 11, 188-199.
- Fukuda-Karlin, A. 2003. "Functions of the Attitudinal Discourse Marker *maa* in Japanese Conversation." In P. Clancy (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, 11, 53-66, Stanford: CSLI Publications.
- Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University. [飛田良文・浅田秀子. 1994. 『現代副詞用法辞典』東京: 東京堂出版].
- Horn, L. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 井上優. 1993. 「日本語の『ほかし表現』をめぐって」、『日本学研究』、3、74-91.
- 国立国語研究所. 2004. 『日本語話し言葉コーパス』国立国語研究所.
- 川田拓也. 2007. 「日本語談話における『まあ』の役割と機能について」南雅彦 (編)、『言語学と日本語教育 V』、175-192、東京: くろしお出版.
- 川上恭子. 1993. 「談話における『まあ』の用法と機能 (一) — 応答型用法の分類 —」、『園田国文』、14、69-79.

- 川上恭子. 1994. 「談話における『まあ』の用法と機能（二）— 展開型用法の分類—」、『園田国文』、15、69-79.
- Kay, P. 1990. "Even." *Linguistics and Philosophy*, 13, 59-111.
- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman. [池上嘉彦・河上誓作訳. 1987. 『語用論』 東京: 紀伊国屋書店].
- Matsumoto, Y. 2001. "Tyotto: Speech Act Qualification in Japanese Revisited." *Japanese Language and Literature*, 35, 1-16.
- 森田良行. 1983. 『基礎日本語 3 — 意味と使い方—』 東京: 角川書店.
- 中右実. 1980. 「文副詞の比較」、国弘哲弥. (編)、『日英語比較講座第二巻文法』、157-219、東京: 大修館書店.
- Nakayama, T. and K. Nakayama 1997. "Japanese kedo: Discourse Genre and Grammaticization." In H. Sohn and J. Haig (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, 6, 607-638, Stanford: CSLI Publications.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- 澤田治美. 1978. 「日英語文副詞類の対照言語学的研究」、『言語研究』、74、1-36.
- Searle, J. 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. London: Oxford University Press.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味 II』 東京: くろしお出版.
- 富樫純一. 2004. 『日本語談話標識の機能』 博士論文、筑波大学.